

第一版序文（1867年7月25日）

…この著作は、1859年に刊行された私の著書『経済学批判』の続きとなるものである。

この書の内容は、この第一巻第一章に要約してある。…

価値理論および貨幣理論の歴史に関する諸説は、こちらでは全部なくなっている。

（ただし、注のなかでは新たな資料が示されている。）

何事も初めが困難だということは、どの科学にも言えることである。

それゆえ、第一章、ことに商品の分析を含む節の理解は、最大の困難となるであろう。

…価値実体と価値量との分析では、できるだけ平易なものにした。貨幣形態をその完成した姿とする価値形態は、非常に無内容で簡単である。それにもかかわらず、人間精神は2千年以上も前からむなしくその解明に努めてきた。しかも他方では、これよりずっと内容豊富で複雑な諸形態の分析には、だいたいのところまでは、成功したのである。なぜか？発育した身体は身体細胞よりも研究しやすいからである。

そのうえ、経済的諸形態の分析では、顕微鏡も化学試薬も役には立たず、抽象力がこの代わりをしなければならない。ところが、ブルジョア社会にとっては、労働生産物の商品形態または商品の価値形態が経済的細胞形態なのである。この場合には実際、細かい詮索が肝要なのであるが、それはまさに、顕微解剖学でそうした詮索が肝要であるのと同じ事である。

…私が予想している読者は、なにか新しいことを学ぼうとし、従ってまた、自分自身で考えようとする人々である。

…私がこの著作で研究しなければならないのは、資本主義的生産様式であり、これに対応する生産関係と交易関係である。その典型的な場所は、今日までのところ、イギリスである。資本主義的生産の自然法則から生ずる社会的な敵対関係の発展度の高低が、それ自体として問題になるのではない。この法則そのもの、鉄の必然性をもって作用し自分を貫くこの傾向、これが問題なのである。産業発展のより高い国は、その発展のより低い国に、ただこの国自身の未来の姿を示しているだけである。…たとえばドイツでは、…ほかの大陸西ヨーロッパ全体と同じに、ただ資本主義的生産の発展だけによってではなく、またその発展の欠如によっても苦しめられている。近代的な窮迫の他に、多くの伝来的な窮迫がわれわれにのしかかっているのである。

この窮迫は、古風な時代遅れの生産様式が時世に合わない社会的な、また政治的な諸関係を伴って存続していることから生じているのである。われわれは、生きているものに悩まされるだけではなく、死んだものにも悩まされるのだ。死者が生者を捉える！。

イギリスに比べれば、ドイツやその他の大陸西ヨーロッパの社会統計は貧弱なものである。

…もしわれわれの政府や議会が、イギリスで行われたように、経済事情に関する定期的調査委員会を設置して、この委員会が真実の探求のために、イギリスのそれと同じ権限を与えられ、この目的のために、イギリスの工場監督官や、「公衆衛生」（"Public Health"）についての医務報告者や、婦人・少年の搾取、住宅・栄養状態、等々についての調査委員たちのような、専門家で不偏不党で厳正公平な人々を見出すことができるならば、われわれは、われわれ自身の状態に恐れおののくであろう。…これらのことについて、自分を欺いてはならない。

…それだからこそ、私は、ことにイギリスの工場立法の歴史、その内容、その成果に、本巻の中であのように詳細なページをさいたのである。一国は他国から学ばなければならないし、また学ぶことができる。たとえ一社会がその運動の自然法則を探り出したとしても、…その

社会は自然的な発展の諸段階を飛び越えることも法令で取り除くこともできない。しかし、その社会は、分娩の苦痛を短くし、和らげることはできるのである。

誤解を避けるために一言すれば、・・・ここで諸人格が問題にされるのは、ただ、彼らが経済的諸範疇の人格化であり、特定の階級諸関係や利害関係の担い手である限りでのことである。経済的社会構成体の発展を1つの自然史的過程と考える私の立場は、ほかのどの立場にもまして、個々人に諸関係の責任を負わせることはできない。というのは、彼が主観的にはどんなに諸関係を超越しようとも、社会的には依然として諸関係の所産なのだからである。

経済学の領域では、自由な科学研究は、他のすべての領域で出会うのと同じ敵に出会うだけではない。経済学の取り扱う素材の固有の性質は、自由な科学研究に抗して、人間の胸中の最も激しい、最も狭小な、最も悪意にみちた感情を、私的利害の復讐の女神（フリアエ）を、戦場に呼び出す。たとえば、イギリスの高教会派は、その三九の信仰箇条のうち三八までに対する攻撃は許しても、その貨幣収入という三十九分の一に対する攻撃は許さないのである。今日では、無神論でさえ、伝来の所有関係に対する批判に比べれば、軽過失なのである。とはいえ、ここにもある進歩は見落とせない。・・・アメリカ合衆国の副大統領のウェード氏は、公開の席でこう明言した。「奴隷制の廃止の次には資本関係と土地所有関係との変化が日程にのぼるだろう！」と。これこそは時代の兆候であって、・・・それが示しているのは、現在の社会は決して固定した結晶体ではなく、変化することの可能な、そして常に変化の過程にある有機体なのだという予感が、支配階級のあいだにさえ目覚め始めている、ということである。

およそ科学的批判による意見ならば、すべて私は歓迎する。私がかつて譲歩したことのない世論と称するものの先入見に対しては、あの偉大なフィレンツェ人の標語が、つねに変わることなく私にあてはまる。 ” なんじの道をすすめ、そして人々をして語るにまかせよ！”

（ダンテの『神曲』Ⅱ煉獄篇第5曲からの言い換え）

ロンドン・1867年7月25日 カール・マルクス